

子どものころと大人：幾つかの遊びの場面から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 志乃 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4863

子どものころと大人

－幾つかの遊びの場面から－

鈴木 志乃

阪本病院

要約

本稿では、河合（1976）の指摘した、日本の文化や社会が母なるものの元型に大きな影響を受けている既存の状態を「母の子ども」とし、それとは区別した、創造的で柔軟な日本的ころの一側面を、「遊び」を通じて生じる「大人の中の子どものころ」として検討した。精神疾患を有する幅広い年齢層の成人女性らが参加した「人形の家遊び」では、自我像を投影し得る人形同士のやりとりは殆どみられず、小さな生活道具や室内の設えが整えられていくプロセスが主であった。日本の古典における「遊び」の場面を見ると、同じく室内の調度に注目した描写が複数認められた。また、大勢の大人がからくり人形で遊ぶことが物事のあるべきほうへと収める逸話から、「遊び」と「子どものころ」の関連を検討した。Henriot（1973/1974）の「遊び」の定義を踏まえると、遊べない状況、あるいは遊びでない諸相に、遊びを発見していける意識の変容を促す力が「子どものころ」であること、「大人」でありながら同時に「子どものころ」を生きる、循環的な位相の重要性が提起された。

キーワード：子どものころ、遊び、分析心理学

I. はじめに：子どものころを考える

疾病分類や障害の有無、年齢、性別といった違いや、それぞれの事情を含む個別性に関わりなく、人の悩みや苦しみ背景には、象徴的な意味での「母との関係における子どもとしての自分」に意図せず突き動かされる諸相が存在する。言い換えれば、社会、組織、世間、あるいは身近な他者や家族などと親和的に同一化すること、それに包まれてある安心感、または居心地の悪さ、違和感などが、時差を伴い、或いは同時並行的にすら体験される。そこに様々な葛藤が生じ、突き当たったその課題を生き、自分なりに収めていくには、何をどうできるのか。このような問いの作業に取り組みざるを得ない側面を、私たちのころは持っている。

何をどうできるのか、という問いには、その人なりに課題に取り組み、問いを生きるプロセスが

そのまま答えとなる。そこに、ある一つのプロセスモデルを提示することは可能であっても、例えばそのモデルの説得感に力を得て、そのモデルどおりに突き進んでみると、決してそのモデルどおりにはならず、そうして進んだ先で、その人独自の課題が出現してきて、否応なくそれに取り組みざるを得ないプロセスが始まる。

心理療法を通じて理解されてくる人間のころの一側面というのはこのように、あくまでも個別性に特徴づけられた動きを伴うものである。

河合（1976）は、日本での心理療法を通じて、日本文化や日本の社会というものが、母なるものの元型に大きな影響を受けて動いている社会であることを指摘した。本稿では、母なるものの元型に大きな影響を受けながら生きる個々人を「母の子ども」とし、全体主義の中での平等意識に捉えられたそのころの位相が、実は「子どものこ

ろ」そのものを喪った状況に通じていると考え、後者の「子ども」について考えたい。母なるもの前では誰もが等価の子どもである、という実感は、大いなるものへの依存と同一化に留まる状況に繋がる可能性を持つ。そうした状況では、遊びは喪われ、混沌が斥けられ、所属する上位概念との同一化を背景に、統一的で全体的な責任ある言動を保つことが可能となる。この構造が社会の存続を可能とする礎となる。しかし、それ一手では社会は硬直し、新しい可能性を見出せず、前例にこだわり、創造性に欠け、同じようではないものを排除する構造が見逃されてしまうことともなる。

上記を踏まえ、心理療法に携わる立場から、社会に「子どものころ」が温存されることこそが、誰もがそれぞれに異なりながら、思い思いに遊べる柔軟で創造的な次の世代へと繋がる社会を成り立たせる貴重な要素ではないかと考え、論を進めたい。Jung (1951/1983, p 82-88) は、本稿が「子どものころ」で表そうとする人間の可能性について、“始原存在にして終末存在である童子”の元型として表現し、人間の意識以前（生まれたばかりの幼児の無意識状態）と、意識以後のあり方（死後の状態の類推による先取り）とを同時に併せ持つ状態を童子元型とした。このイメージには、内的人格の全体性が表象される。

童子元型を介すると、たとえば現代の高齢化社会は、先細りの人口構造としてネガティブに捉えざるを得ない硬直した評価を超え、ようやく「子どものころ」が取り戻され、成熟へと向かう可能性に開かれた時機と考えることすら可能となる。分析心理学に基礎づく心理療法に携わる立場から、こうした意味での「子どものころ」について、検討を試みたい。

II. 素材の提示

まず、ある治療的な共同体で行われた「遊びの時間」を取り上げ、「子どものころ」が動く状況を理解していきたい。共同体は、30代から80代の成人女性数十人の集まりで、統合失調症を主とした精神疾患の診断を受けており、自宅での生

活が続けられないことから一つところに寝起きする治療場である。治療スタッフは多職種で構成され、薬物療法のみならず作業療法に基づく多彩な活動が行われる。心理職が担当した「遊びの時間」では、箱庭療法の道具を活用した集団での遊びや、彩色画などが行われた。そうした活動の中で、治療スタッフから自発的に「人形の部屋遊び」の諸道具が持ち込まれる。子育てが終わり使われなくなって押入れに仕舞いこまれていた幾つかの遊び道具が、寄付されたものである。遊べる道具の一つとして場に置いておくと、複数人が自発的かつ同時多発的に遊び始めた。本稿では、その一部を時系列に添って提示する。なお、活動写真の撮影は予め当事者に許可を得ておこなわれた。

(1) 期間と活動内容

【期間】X+2年8月～12月 【頻度】週二回90分
【内容】X年6月から、筆者（以下Th）が担当した病棟での作業療法枠の活動（鈴木，2013a）を経て、X+2年4月から、Th担当の病棟活動（鈴木，2013b，2019）が行われた。その一つである「療養棟での箱庭遊び」と並行して発生した「人形の部屋遊び」を取り上げる。【場所】食堂兼憩いの場であるコモンスペースの一角に箱庭を一面設置し、Thが常駐する。【その他】療養者の自発的な参加を原則にした。諸活動は阪本精神病理学研究所の助成を受け、療養者には事前に写真撮影を含む各種記録の許可ならびに個人情報に配慮した上での事例開示について許可を得ている。

(2) 活動の経過

#1-3

Thは、箱庭療法に用いられる箱とアイテムの人形類をコモンスペースの端に設え常駐する。既存のプログラムに倣い参加することを促すものではなく、Thが道端の露天商のような距離感で、コモンスペースにいることから始める。中井（1973）を参考に、統合失調症と診断された人にとっての不安喚起を避ける目的から、砂の導入を当面控え、目の詰まった起毛の布を敷く等した。これまでの活動に積極的に参加してきた人を中心に、箱にアイテムがざざ〜っと流し込まれ、箱の中で並べ直

す等して遊ぶ輪ができる。常時、複数の見学者がたむろしている。Th には、プレイルーム内で Th も共に皆で遊んでいる感覚が強い。

#4



Figure 1 ごちゃごちゃの玩具が整理される

あるスタッフから、「子どもが昔使っていたのが押入れに眠っていたから」と、ままごとの人形の部屋のセットが幾つか寄付される。Th は考えた上でコモンスペースの空いたテーブルに置いておく。「いやあ懐かしいなあ!」と歓声があがり、こまごまとした生活道具を触って遊び始める二人。その様子は、Th には、まるで引っ越し直後の混沌に手をかけ取り組みはじめる瞬間のようでもあり、あるいは、長く打ち捨てられていた古い家に、時間が戻ってきたかのような瞬間として受け取られた。

#5

見学していた人たちが、箱庭道具の傍らでよく遊ばれているミニカーについて、「これは男のものやね」。そして人形の部屋遊びを指し、「あっちが女の」と言う。一つの人形の部屋を作ることに、複数の人が取り組んでいる。「先生見て」と、皆で作りかけのうさぎの家が Th に披露される (Figure 1 右図)。<赤ちゃんがいますね>と言うと、「本当。」と、揺り籠から椅子へ移動、乳飲み子から幼児へと成長する (Figure 2 左⇒右図)。続けて、こまごまとした食べ物、家の外から食卓へと並べ入れられる。<特別な日の御馳走でしょうか…誕生日かな?>長らく無言で見ていた一人の高齢女性が、「…エビですね」と言う。卓上の茶色いお菓子を言うものか、「ああドーナツ。エビの丸くなったような? ドーナツもあり、エビも

あり、余裕のある家。」と、ある人が上手に応じる。<経済的に、余裕のあるおうち。>と Th が混ぜ返すと、皆がアハハと声をあげて笑う。「…赤ちゃんの家ができた」。先ほどの人が、またポツリと口にする。それまでそばに座っていた別の高齢女性が、「私、赤ちゃんがいるのよ?」と、Th をつかまえて言う。活動を静かに見ている高齢女性から、次々に‘赤ちゃん’と発せられる声。Th は、この場に赤ちゃんが生まれたのか、と思う。

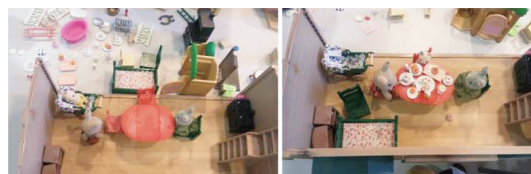


Figure 2 うさぎの赤ちゃんと家族 (左⇒右に作業が進む)

#8-9

一人静かに座る女性の前に、いつの間にか草花の茂みの影の地藏や河童、動物が置かれ (Figure 3 左図)、道祖神のような像、羊や鶏が集う神社の一角ができる (Figure 3 右図)。



Figure 3 地藏や道祖神、神社のある一角 (左⇒右に作業が進む)

また、初めて顔を出した人が、「うちは、商売、お店やってたから、こんな部屋がなかった。だから、こんな揺り籠に赤ちゃんを入れて、面倒見ていたの。」と、別の人が取り組んでいる人形の部屋を眺め、話す (Figure 4 左図の左下に揺り籠)。そして、「これは何? かぐや姫?」と、女の子を置く (Figure 4 右図の右上)。それに呼応するように、部屋の作り手は女の子の傍に赤い花柄のカバンを添わせる。



Figure 4 ピアノや太鼓のある子ども部屋
(左：作業中部分) (右：完成図)

‘かぐや姫’を置いた人は、その後、玩具が広げられた一角に座り、緑の起毛シートの上に、小さな生活道具いろいろを並べ、長時間笑顔で嬉しそうに見入る。(Figure 5)。



Figure 5 生家に部屋のなかった人が置いた生活用具 (オープン、じょうろ等)

#16-23

ふらふらとやって来た人がThに話し掛ける。「今日、買ったんですよ」と履いたズボンを指し、「旅行はいいですねえ。二晩ともに寝ませんでした。太郎を抱いてやって。そうしたら寝ましたねえ。」<安心したんですねえ>「海辺の。海岸はいいですよ〜。」<気持ちがいいですねえ〜>。近況、買い物にも旅行にも行けていない人のこうした語りをはじめ、切れ切れのイメージを聴いていると、赤ん坊や小さな子どもが出てくることが多い。そのうち、其処彼処で作られた部屋が並べられ、披露されることもある (Figure 6 上図)。セッションが20回目を越える頃には、室内が随分整うようになった、とThは感じる。実際、作り手の女性達の居室には、身体上の必要性からポータブルトイレが置かれるところもあり (Figure 6 下左図の2階中央に便器)、コモンスペースには季節の飾りつけが都度登場し、本棚も置かれていて、今のこころの生活が現れたかのようである

(同 Figure 6 下左図)。また、毎回豊富に準備される小さな玩具は、部屋作りに利用されるだけでなく、テーブル上にも小さな空間が創造され、その全てが、集う人々によって丁寧に見守られた (Figure 6 下右図)。



Figure 6 多彩な室内空間 (上図、下左図) と
テーブル上の小さな空間 (下右図)

(3) 解説

本稿で取り上げた上記の素材は、参加者個別の経過を追ひ、心理学的介入の効果を検証することのみを目的としたデータではなく、あるいは集団療法の一例として、個人間の力動を把握し各人における治療的影響を検討する素材でもない。行われた活動は、別で述べたとおり (鈴木, 2019)、心理職が対象の生活に入っていく臨床に特有の、“共にしたその場に即興で応じきる” (p. 88) こと、あるいはまた、“その場で互いに影響し合い、こころ動かされることを互いが受け入れるやわらかな態度” (p. 88) を基盤に、“堅固な構造の内部に足りないものを補う形で生まれたコミュニティ状況” (p. 84) として理解される。既存の治療プログラムへの参加に消極的な好癖状態とみなされる人が多数おり、規則正しい生活療法を漫然と続けざるを得ない状況に、遊びを取り入れることを介して、治療的な場そのものが活性化することが目的とされた。特に本稿で取り上げた素材は、Thが最初に提案した、箱庭を活用した遊びを超え、自然発生的、自発的に生じて来た遊びである。

以上のことから、経過を個別の展開としてみることはできないが、場の全体として何が生じていたかをみていくと、安全な生活環境の中で、‘活

動プログラムへの参加’ではなく、折に触れ、おのずと遊ぶ（遊べる）瞬間に開かれる出来事が、同時多発的に生じているのが分かる。箱庭療法の道具立てを活用した遊びに集団の場で触れてゆくほどには、こころの準備が整わない人たちは、慎重に箱庭を避け、各々の幼い頃を想起させる「人形の部屋遊び」に一時、興じることが自然発生していく。そうしたこころの動きは、‘赤ちゃん’（#5）＝その場に生まれた新しい命、というイメージに集約され、その見えない新しい身体（こころの体）がその場で育てられていくかのように、うさぎの赤ちゃんが、揺り籠からテーブルの椅子で立派に座位をとるまでに成長し（Figure 3 左⇒右図）、音を奏でる楽器に恵まれた子ども部屋（Figure 4）には、お稽古事を連想させる布地のカバンと少女が登場する。

このように、この場に生じた子どものイメージは、育ちゆくこころが開かれていく動きとしてセラピストに受け取られ、活動最初期、揺り籠（#4）に投げ込まれた、足のはみ出た大人の女性（Figure 1 左下図）と併せ、大人に「子どものこころ」を取り戻していくプロセスとして理解された。眠りから覚めた荒れ放題の平屋（Figure 1）への引越しに始まり、毎回、指先ほどの小さな生活道具が熱心に整えられ（Figure 1-6）、自我像を投影し得る人型フィギュアと立位の動物（シルバニア）の出番は非常に少なく、多くの場面で生活用具を整える作業が主であった。このように小さな生活空間の創造を通じて、混沌から構造ある世界を生み出すプロセスが生じた。

次章からは、上記の「大人のこころの中に生じる子どものこころ」が「遊び」を通じて生じる点、また「遊び」が生じる外的な現象を通じて、こころには何が起きているのかという点について、日本の古典を介在させながら、考察を深めていきたい。

Ⅲ. 考察

1. 「人形で遊ぶ大人」に関する古い逸話の提示：

今昔物語より

今昔物語の「高陽親王造人形立田中語第二」は、

大勢の「大人の中の子どものこころ」が、遊びを介して刺激され、その動きによって田んぼの水枯れが解消されるという逸話である。桓武天皇の頃、早魃の年に田んぼが干上がり、その対策の試みに、細工の名人である高陽親王（桓武天皇の皇子）が、からくり人形を作ってことを収める。人形は、水の入る器を両手に捧げ持ち、そこへ実際に水を入れると、人形みずから自分に水を流し掛ける。その様子がとても愉快なので、周辺の者にとどまらず、「聞継」（聞いては伝え）して、市中の人々が行列をなして、人形の行水するさま見たさから器に水を入れにくる。そういうわけでいつの間にか、副次的に、枯れた田んぼに水が張られた、という逸話である。「大人の中の子どものこころ」を表すには、うってつけの小話であるように思われる。以下に、その現代語訳の抜粋を記す（馬淵ら、1974, pp. 273-275）。

“身の丈四尺ほどの童子が両手で桶を捧げて立っている人形を作ってこの田の中に立てた。人がその童子の持っている桶に水を入れると、水がはいるときに顔にながしかける、とこのように工夫して作ったので、これを見る人は、水を汲んで人形のもっている桶に入れる。すると、水を受けては顔に流しかけ流しかけするので、これをおもしろがって、話を次々と聞き伝え、京じゅうの人が市をなして集まってきて、水を桶に入れ、それを見て大騒ぎをしておもしろがる。このようにしているうちに、その水が自然にたまって、田に水がいっぱいになった”。

今昔物語は、平安末期のアンソロジーで、国内外の仏教説話や世俗話が収められ、その典拠は多岐に渡る。馬淵ら（1974）によれば、本話は典拠未詳ながら、類話として高陽親王の工作の妙を伝える逸話があり、それに唐代説話集の人形に関する類話を組み合わせ、創作されたものか、との仮説が挙げられている（p. 273）。ちなみに、唐代の人形の逸話とは、ある技術者が木や皮で作った役者人形を王にお披露目すると、本物の人のように巧みに動き、果てはその仕草に側女が誘惑されるほどで、立腹した王は技術者を殺害しようとする

る。技術者が人形を解体し、確かに人形であることが検められると、技術を極めるということは創造主に等しいと王が感心する、という筋である(「朝野僉載」等所収の「楊務廉」の話)。

この国外の説話は、今昔物語のからくり人形がもたらす愉快な世界とは大きく印象が異なっているのが分かる。今昔物語は、大勢の大人たちが、子ども心を発揮して遊ぶことで水田が復活するという仕掛けであり、そこには日本的な遊び心(太陽の女神を、踊りと笑いで岩屋から導き出す日本神話にはじまり)が満ちている。大人に、子どものころが生じることが、既存の硬直した状況(いかんともしい難い旱魃)に、創造的な展開をもたらしている。加えて、大勢の大人の中の子どものころによって救われる対象は、日本の主食を育てる重要な場としての田んぼであり、水は、その育ちになくってはならない重要な要素である。以上のことより、日本において困難が生じるとき、「大人の中の子どものころ」の発動により、水を引くことで解決をみる、という一つの象徴的な理解がなされる。

2. 「人形で遊ぶ大人が水を引く」ことに宿る「子どものころ」の考察

「水を引く」とは、どのようなことであろうか。民俗学者の柳田(1977)は、アルスの児童文庫初出「日本神話伝説集」(1929)において、全国各地の伝説から、「水をみつける」(p. 28)ことに関する逸話を数多く集積している。旅人にとっての飲み水、生活用水、田植えの水等々、人々の命を支える礎となる水を、どこから採取してくるか、誰がそれを可能にしたか、といった逸話が全国各地に豊富に伝わり、古来の人々にとってそれが文字通り、生命線であったことがわかる。「水をみつけることが普通の人よりも上手な者があって、土地の様子を見て地下に水のあることを察し、井戸を掘ることを教えた」(p. 28)存在は、その土地の定住者ではなく、各地を巡る漂泊の行脚僧であったことが指摘され、更に、彼らの登場以前から、「水の恵みを大切に感じて、そこに神様を祀ってそのお力を敬うていた」(p. 29)こと、またそ

の多くに「地蔵」が関わること(p. 131-147)も明らかにされている。

集合的な意識を表す、その土地の定住者とは、既存の「大人」の状態として言い換えることができるだろう。彼らには気付くことができない、その土地に既にある水脈を探り当てることのできる創造的な発見者、人智を超えた力は、その土地に属さない漂泊者として表される、無意識の領域に属し、あるいはまた、子どもの神様として知られる「地蔵」に宿る。(なお、章Ⅱで示した Figure 4にも、草花の茂みの影に地蔵、神社が置かれた。)今昔物語の逸話には、日本古来、社会の維持に必須であった「水を引く」バリエーションの一つが示され、そのオリジナリティ溢れるユニークなアイデアは、「大人の中の子どものころ」によって生じたものである。

「水を引く」逸話で有名なものに、Jung が引用した、中国の旱魃における雨乞い師の話がある(Jung, 1951/2011, pp. 370-371)。ヨーロッパ人の Jung が、西洋的な精神の在り方との対比において、東洋における「因果律抜きの考え方」(p. 371)として提示したのは次のような話である。中国のある地方で、旱魃の悪霊を追い払うため、カトリック、プロテスタント、中国の各方法を試みるが、失敗に終わる。別の州(中国)から呼び寄せた雨乞い師が、小屋にこもって4日目、雨が降る。その要因を問われた雨乞い師は、ものごとが秩序の中におさまっているよその土地から自分は来た。ここは、ものごとの秩序から外れている土地である。それで、自身もまた自然の秩序から外れてしまい、元の自分を取り戻すのに三日待たねばならなかった。すると、おのずと雨が降った。と、因果律ではなく共時性で、ものごとを“一つの全体として理解する”(p. 732)。ここでの、ものごとの秩序とは決して、人智による理路整然とした社会構造を指さず、“天のさだめによるしかるべきありかた”(p. 371)を指している。そのため、ものごとが秩序から外れている位相こそが、大人が作る理路整然とした社会構造であると考え理解し得る。

日本には、水引き地蔵（柳田，1977, p. 133）や、田植えの頃の水喧嘩（柳田，1977, p. 136）という言葉があるように、「田に引く水」は、日本のころにおいて重要なメタファーである。その水引きを手助けするのが「子どものころ」であり、それは「地蔵」にも表象される。今昔物語の逸話では、遊び心を刺激された“京中の人”（馬淵ら，1974, p. 274），すなわち「全ての大人」の中の「子どものころ」が、早魃から生じた困難な事態を緩和する。こうしてみると、「子どものころ」とは、いわば大人の意識がどうしても作りあげてしまう意図的な積み重ねで生じた硬直状態から、それらを本来的なあるべき姿へと変容させ得る力として、改めて理解することができる。

3. 「玩具としての小さな道具で遊ぶ」ことの意味： 枕草子と源氏物語より

次に、章Ⅱの「人形の部屋遊び」において、「人形」よりも重要な要素であった「小さな生活道具」について、理解を深めたい。

「枕草子」のうつくしきもの、即ち、かわいらしいものを挙げた章段は、“瓜にかぎたるちごの顔”（ささやかな手遊びに、瓜の表面に彫り付けた幼児の顔）、にはじまり、2, 3歳の子の這う姿や、しっかりした自我が芽生える以前の、無心な子どもの仕草や様子が、細やかに羅列される。その合間に配列された、“雛の調度”で始まる一節は、“なにもなにも、ちひさきものはみなうつくし”と結ばれる。雛の調度は、現代ではひな祭りの人形飾りの一つを指すが、平安時代においては、雛あそび（小さな人形遊び）の道具を指す。飾り物として、静的、記号的な雛人形飾りとなる以前、少女たちの、そしてそれを見守る大人にとっても、夢中になって入り込める、躍動する遊びの一つであった。

「源氏物語」には、実際の雛あそびの様子が幾つか描写されている。巻五若紫では、“雛など、わざと、屋ども作り続けてもろともに遊びつつ、こよなきもの思ひの紛らわしなり”，また巻七紅葉賀では、“いつしか雛おしすゑて、そそきる給へる。三尺の御厨子一具に、品々ちつらひすゑて、

また小さき屋どもつくり集めて、たてまつり給へるを、所せきまで遊びひろげ給へり”等と、その描写は、雛（小さな人形）を人間に見立てたやりとりの描写ではなく、細やかな道具立て＝空間に関する記述が主となっているのがわかる。このことから、当時の女子の遊びが「屋」（人形のための部屋）をしつらえることに重きを置いている事実を捉えることができる。「枕草子」が、細やかな身の回りのできごとを繊細にとらえ、選び、記述した、日本最初の随筆集であることから、なんと小さくて愛らしい…！と、強く動かされるものの正体は、幼子の無心でいたいけな様子と同列に置かれた、小さく小さくかたち作られた生活道具を模した玩具が惹起する、「大人の中の子どものころ」と言えるであろう。

このように、大人が思わず子どものように遊ぶ現象に現れるころの位相とは、自分自身を投影し得る人形に内面を身代わりさせ、人間同士のかわりあいの人形で演じるようなものではないことがわかる。人形を使った争いや家族ごっこといったものばかりが遊びなのではない。人形の世界が持つ「小ささ」にころ動かされ、そこに自分との何らかの共通点を認め、その世界を作り、整える、という作業の中に、大人も子どもも、ころそのものを見出していく側面があると考えられる。

IV. まとめ

1. これまでの展開

以上、章Ⅱにおいて、高齢期までの幅広い成人女性の集団が体験した「人形の部屋遊び」で作り上げられた作品の検討を通じて、「大人の中の子どものころ」が、おのずと遊ぶことの中に見出されてくることを整理した。続けて、章Ⅲにおいては、章Ⅱで明らかとなった「大人の中の子どものころ」について、更に考えることを目的に、日本の古い説話集「今昔物語」から、同テーマが認められる逸話を取り上げ、日本的なころとしての「大人の中の子どものころ」について、民俗学者の柳田による理解や、Jung の引用した逸話を引いて検討した。加えて、章Ⅱの「遊び」に

特徴的であった、「人形」ではない「生活道具を用いた空間づくり」の意味を理解する一つの試みとして、日本の代表的な古典作品に認められる「人形遊び」の一節を幾つか引用し、考察を加えた。

これまでのことから、「遊び」というものが、ごく素朴な理解としての、児童期までの発達段階に限られた、あるいは思春期、青年期における勉強に対比させた諸活動にとどまるものではなく、「大人」にも、ひいては総ての人にとって、既存のルールや環境等における不活性で沈静化したこのころの状況を刺激し、場を変容させる可能性を持つものであることが整理された。すなわち、「遊び」を介して呼び起される「子どものころ」が、従来の限界状況を新たに開く、柔軟さや創造性を生じさせる力を持つものとして理解された。

では、こうした「子どものころ」を生起させ得る「遊び」とは、その本質においてどのようなものであろうか。

2. 「遊び」の本質と心理療法の態度

Henriot (1973/1974) は、「遊び」に関する論考において、その代表的論者である Huizinga (1938/1963) や Caillois (1958/1970) のみならず、心理学者として、Freud, Klein, Piaget を引用し、「遊び」を論ずるということは、その諸形態の分類でも、調査研究による定型化、あるいは遊びの機能を規定することであっても、まだ不十分であると指摘する。その上で、遊びとは何かを定義する行為そのものを体系的に取り上げ、哲学的な考察を試みている。

なかでも、遊びと仕事の素朴な対比（生産性の有無という視点）を批判する文脈で、“遊びは、自身の外部には何ひとつ生産しない。けれども、ある程度まで、遊び手は遊びがつくる作品だ” (p. 103) とする指摘は、心理療法における遊びの本質を指し示すようである。私たちが利用する道具やルールのほうに主体があり、それらに突き動かされて変容する私たちそのものを体験していくことは、クライアント、セラピスト双方が「遊び」に入り込んでゆく遊戯療法のみならず、心理

療法を構成する重要な要素の一つとしてある「遊び」でもあるだろう。

但し、“遊びに無我夢中になることは、遊びから外へ出るということ”であり、“遊び手が自分の遊びをあくまで自覚していること、そして距離をたもつことを、要求している。遊び手は、「肌着から肌を区別する」ことを心得ていなければならない” (p. 111) とする Henriot (1973/1974) の定義は、その場に徹底して没入することを敢えて選べるだけの覚悟が用意された心理療法の態度からすると、若干印象を異にする点がある。

心理療法においては（弘中，2019），クライエントが遊びに没頭することをただ傍観するのではなく，“何か大切なことが展開していることに対する畏敬の念とも言える感覚に浸って” (p. 20) いるセラピストの存在があってはじめて、クライエントの「遊び」の体験に、治癒的な質がもたらされることが自明のこととなる。心理療法における「遊び」は、時に、肌着がまるで肌そのものであるかのようにぴたりと密着する瞬間を、クライエントとセラピスト両方で体験しながら、やがて肌着が肌から離れる瞬間も、繰り返しながら含まれているような体験ともいえる。

また、本稿で取り上げた今昔物語の「行水するからくり人形」の存在は、単にもの珍しい玩具であるにとどまらず、大勢の大人たちに繰り返し水を汲んで運ばせ、日照りで枯れた田んぼを潤させるほどの力を持つ、「行為者」そのものでもあった。“遊びのなかで、メタモルフォーズをほどこされるのは対象ではなく、主体である、ということを理解しなければならない” のである (Henriot, 1973/1974, p. 149)。なお、この逸話の興味深い点は、そうした仕掛けを持ち込んだ高陽親王に、人形という道具を使って人心を巧みに操ることを可能とした策士の一面を（自我意識を中心として）みるのではなく、“極めたる物の上手、風流の至せる所なりとぞ、人讃めける”（馬淵ら，1974, p. 275）すなわち、“これもみな親王が工芸についてすばらしい名人上手であったたまものである”（馬淵ら，1974, p. 275）という理解が示されてい

るところである。つまり、人のところを動かすほどの人形を生む創造性のほうに、焦点が当てられているのである。心理療法におけるセラピストは、決してみずから人形を創造するものではないが、ところを動かす‘人形’にあたるものが、おのずから遊びの中に生じる瞬間を待ち、それを共にする。心理療法に携わる立場からは、生じてきた事態、出来事そのものに興味深く関与する、見守り手としてのセラピストの性質が、高陽親王にも見出されてくる。

3. 結論：「大人」と「子どものころ」の弁証性と併存性

Henriot (1973/1974) の、“考察しなければならないのは主体が遊びに使う対象ではなく、主体が遊ぶ役割である” (p. 149), という指摘は、本稿が詳細に遊びの道具としてのミニチュアに注目して考察したこと自体を否定するものではない。

豊富で雑多な小さい道具が、精神的な課題を抱える成人女性達に延々と整理され、人形の部屋のしつらえが其処彼処で整えられ、空間整理に取り組まれた現象は、即ち、‘ころの部屋作り’としての作業が現れたものであると、理解することを改めて可能にする指摘である。古典作品に述べられた雛あそびもまた、女兒のころと、それを見守る大人のころとが、共に新たに整えられていく様子として理解することが可能となろう。「大人」と「子どものころ」とは、共に、同時に並んで成り立っている。

以上、断片的に「遊び」の論理を、Henriot (1973/1974) から引用し、本稿で取り上げた遊びの場面と参照した。Henriot (1973/1974) は、遊びがその本質によって弁証的なものであるように、弁証法そのものがその原理において遊びである、とも述べた上で、“遊ぶとは、かならず、遊びの世界に属さぬ何かとともに遊ぶこと” (p. 168) であり、“存在の内部構造を分解し、狂わせる” (p. 168) ものもであることを指摘する。それは、言い換えれば、“人間が、現状どおりに存在するものとは別の何かを想像しうる、(略) 発明しうる、ということ” (pp. 168-169) でもあると指摘

している。

本稿が、「大人の中の子どものころ」という呼称を通じて明らかにしようと試みてきたことは、Henriot (1973/1974) に倣うと次のようなことである。

既存の事物や出来事といった現象全体を、それそのものとして受動的に受諾し得る「大人」の態度が、先ず意識に選択された上で、それらが否定され、そうすることではじめて、否定する前の、既存の諸相とのかわりが新たに生じる。それは、私たちの置かれた状況そのものを「遊びと呼び得る意識」へと、私たち自身を変容させる態度の成立につながっていく。これが、「大人」でありながら「大人」であることに甘んじることなく、「子どものころ」を「大人」が同時に生きる在り方であるといえる。

心理療法においては、母なるものの元型に大きな影響を受けながら無自覚に生きる我々のころが改めて、心理療法という作業台の俎上にあがることで、「母との関係における子どもとしての自分」の位相が、個人的な諸相を通じて改めて捉えられることが可能になる。全体主義の中での平等意識に、意図せず過度に捉えられてしまっていたころの位相が、それぞれの在り方で焙り出され、個々別々に多様な展開を積み重ねる中、再検討されていく。心理療法の最初のほうに現れてくる「母の子ども」のころは、無個性で、重要な他者あるいはインパクトを持つ外部の事象との同一化を保持していて、創造性には繋がりにくい状態に留まっている。それが、心理療法におけるクライアントとセラピストの相互性を通じて、新たに「子どものころ」を生きられる方向へ、両者が共に開かれてゆく。クライアントの年齢如何を問わず、「母の子ども」の従順さや受け身性に、「子どものころ」の創造性や能動性が生きられてゆくことは、理性の勝った「大人」が、「子どものころ」の自由闊達さを同時に生きられもすることであり、そこでようやく双方の弁証性や併存性が、生き生きとしてくる。

心理療法における以上のようなプロセスが、本

稿では、心理療法とはまた異なりながらも、底のほうで共通性を持つ心理臨床活動の中にも認められることが整理された。Jung (1951/1983) が提起した、“始原存在にして終末存在である童子”の元型は、対極にあるものの同時性を示すことを通じて人間の全体性を表現していることを、先に引用した。危機にあるときこそ可能性に開かれていく力や、硬直して退路を断たれた状況において新たな位相を発見する力が、「大人の中の子どものころ」といえるのではないだろうか。

本稿で取り上げた心理臨床活動は、精神科医療や治療の共同体という、いわば「遊び」では済まされない現実的な状況において、それらを新たに「遊び」として展開してゆく意識ならびに場を生起させるものであったことが改めて整理された。「遊びではない」諸相を対象として得たとき、その限定の中で対抗的に「遊び」が生起するのではなく、元来どこにでも潜在しているはずの「遊び」を、「遊びではない」ものの中にこそ見出してゆくところの態度が、「大人の中の子どものころ」であるといえる。

V. おわりに

以上、本稿での検討を通じて、心理療法ならびにそれに類するところの作業プロセスから見出された独自性は、日本文化や日本の社会においても活用可能な価値を持つと考える。「大人」が「子どものころ」をも同時に生きるとき、未熟さを抱えられるという意味において、文化や社会もまた、よりいっそう成熟してゆくことが期待される。「子どものころ」を取り戻した「大人」は、偉大な存在や大きなシステムに受動的かつ無個性に従う、「母の子ども」としての「大人」を後にして、より一層の成熟が促され、次の社会へとボタンを繋げてゆく存在となるであろう。世界的に多様な危機に晒される現在、「母の子ども」のままで老いゆく側面を持つ個人、その集合体である国家が、「大人の中の子どものころ」を改めて見出そうとする取り組みは、遊びでは済まされない現実的な諸問題の中に「遊び」を発明する力とも

なり、柔らかな創造性を育む礎を作るのではないだろうか。

文献

- 馬淵和夫・国東文磨・今野達（校注、訳）（1974）.
今昔物語 3 日本古典文学全集 22. 小学館.
- Caillois, J. (1958). *Les Jeux et Les Hommes*. Paris: Gallimard. 清水幾太郎, 霧生和夫（訳）（1970）. 遊びと人間. 岩波書店.
- Henrion, J. (1973). *Le Jeu*. Paris: Presses universitaires de France. 佐藤信夫（訳）（1974）. 遊ぶ主体の幻想学へ 遊び. 白水社.
- 弘中正美（2019）. 没頭することとプレイセラピー. ユング心理学研究, 11, 13-22.
- Huizinga, J. (1938). *Homo Ludens*. Paris: Gallimard. 高橋英夫（訳）（1963）. ホイジンガ『ホモルーデンス』. 中公文庫.
- Jung, C. G., Kerenyi, K. (1951). *Einführung in das Wesen der Mythologie*. Zurich: Rhein Verlag. 林道義（訳）（1983）. 続・元型論. 紀伊国屋書店.
- Jung, C. G., Douglas, C. (Ed.) (1997). *Visions: Notes of the Seminar Given in 1930-1934*. New York: Princeton University Press. 氏原寛, 老松克博（監訳）角野善宏・川戸圓・宮野素子・山下雅也（訳）（2011）. ヴィジョン・セミナー 1. 創元社.
- 河合隼雄（1976）. 母性社会日本の病理. 中央公論社.
- 中井久夫（1973）. 精神分裂病の寛解過程における非言語的接近法の適応決定. 芸術療法 4 中井久夫（1984）. 中井久夫著作集 精神医学の経験 1 分裂病. 岩崎学術出版社, pp. 83-114.
- 鈴木志乃（2013a）. 統合失調症者の長期入院病棟で取り組まれた集団描画「わたしたちの樹」の考察. 心理臨床学研究, 30(6), 821-830.
- 鈴木志乃（2013b）. 精神科病院におけるグループ活動の報告—海を舞台にした創作話の検討. 大阪樟蔭女子大学臨床心理学専攻カウンセリングセンター紀要, 6, 51-57.

鈴木志乃（2019）．おはなしにならない言葉がおはなしになるとき—統合失調症と診断された人たちと即興で紡ぐ連想物語の考察．ユング心理学研究, 11, 69-92.

柳田国男（1977）．日本の伝説．新潮文庫．